



取材活動を通して考えること

水未来会議2020

2020年1月24日

一般社団法人Water-n代表理事

Webジャーナル「MizuDesign」編集長

東洋大学PPP研究センターリサーチパートナー

奥田早希子

自己紹介

- ✓出身 兵庫県尼崎市
- ✓職歴
 - ・「環境新聞」水ビジネス担当記者11年
 - ・積水化学工業 環境・ライフラインカンパニー 経営企画部マーケティンググループ
- ✓現在
 - ・一般社団法人Water-n代表理事：Webジャーナル「Mizu Design」編集長として運営
水のCSR誌「Water-n」発行
 - ・フリーランス記者・編集者、環境新聞契約記者
 - ・東洋大学PPP研究センターリサーチパートナー
- ✓公的活動
 - ・環境省Water Project 会員企業の情報交流の場「グッドプラクティス塾」発起人、運営メンバー
 - ・浄化槽リノベーション推進検討会委員(2019年7月～2020年3月27日)
 - ・下水道広報プラットフォーム企画運営委員



官民連携 ウォータープロジェクトとは

- 「水循環基本法」に基づき、健全な水循環の維持・回復のための取組推進のため、官民連携「ウォータープロジェクト」を発足。
- 環境省が関係主体間の連携協力の場をつくり、民間企業等の主体的・自発的・積極的な活動を推進し、全国的に幅広く国民の理解と関心を深める。

平成26年8月1日発足（令和元年12月27日現在：198団体参加）

＜ポータルサイトでの情報発信・参加団体募集＞



HPはこちら

＜イベントの開催＞



＜啓発ロゴの提供＞



8月1日は水の日



■ 自発的な活動の促進

■ 国民の意識醸成



異業種交流サロン グッドプラクティス塾とは

- 気候変動等を背景に、水リスクへの対応が持続可能な経営の主要素となっている。
- 共通目標(SDGs)と、これに対応する企業の活動状況(ESG情報)を投資判断等につなげる動きがある。

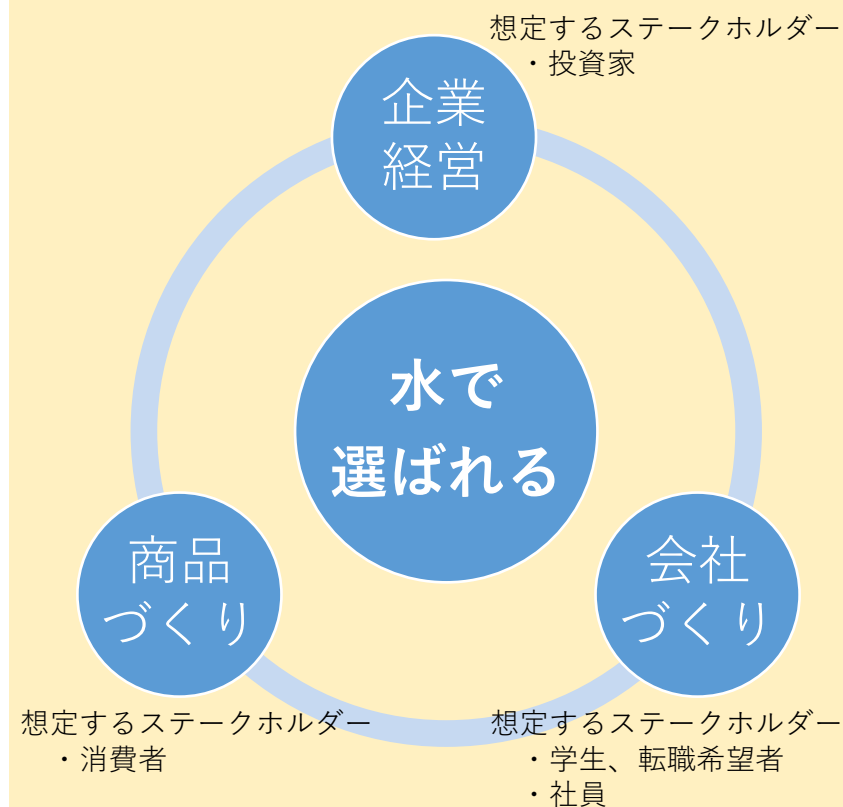
「水」に関して何にどう取り組むべき？

- 民間企業等が「水」に関する互いのグッドプラクティスを共有し、それぞれの取組をブラッシュアップする場として、平成31年4月に「グッドプラクティス塾」を発足。(発起人:環境省、一般社団法人Water-n)

	日 時	主な内容
第1回	平成31年4月26日 16:00～18:00	• 塾の趣旨説明 • 各社の水に関する課題共有 • 塾の活動内容、進め方に関するディスカッション
第2回	令和元年6月26日 10:00～12:00	• 八千代エンジニアリング(株)からの事例発表と意見交換 • 塾の具体的な取組目標、内容に関するディスカッション
第3回	令和元年8月7日 15:30～17:30	• 花王(株)、(株)トーケミからの事例発表と意見交換
第4回	令和元年11月5日 15:30～17:30	• 日本下水道事業団、(株)東京設計事務所からの事例発表と意見交換
第5回 (予定)	令和2年2月3日 16:00～17:30	• ライオン(株)、八千代エンジニアリング(株)からの事例発表と意見交換

目標像：水で選ばれる企業に

- 水に関して、何にどれくらい取り組むべきかを考え、
- その実態についていかに伝え、各ステークホルダーといかにコミュニケーションを深めるかを考え、
- もって『水で選ばれる』の実現へ



発想のウィングを広げよう

✖ 散見される悪例

下水道⁶ の人が、下水道⁶ のために、下水道⁶ を良くすることを考える

- ・発想が広がらない
- ・良くするための行動の選択肢が広がらない
- ・下水道⁶ 以外の分野に良い影響がにじみ出ない

○こんな風に考えたい

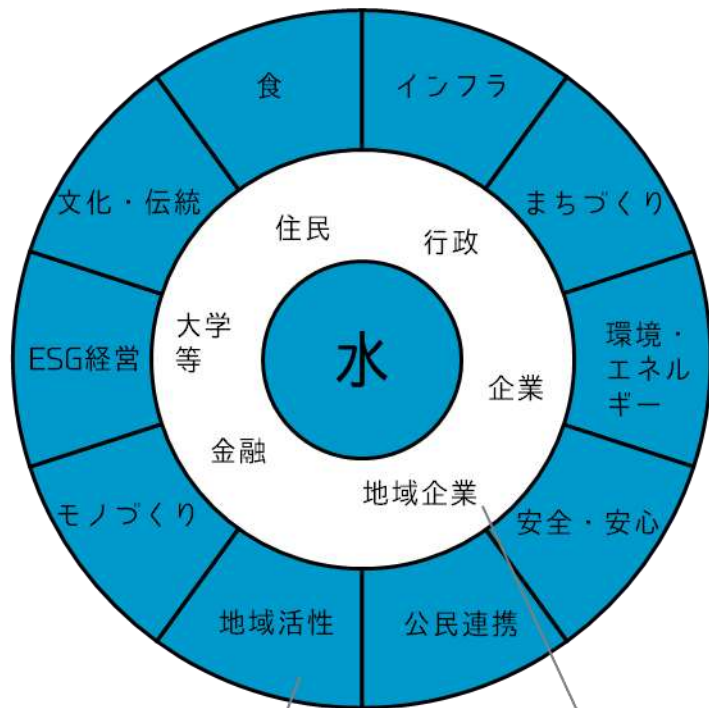
下水道(水)⁶ を通して、社会のために、社会を良くすることを考える

- ・発想のウィングが広がる
- ・良くするための行動の選択肢が広がり、最適解に近づく
- ・良い影響が広くにじみ出る



発想のウィングを広げよう

Webジャーナル「Mizu Design」の視点



10の 카테고리 6のプレイヤー

水と社会・経済・地域活動との関連に多面的にアプローチした情報



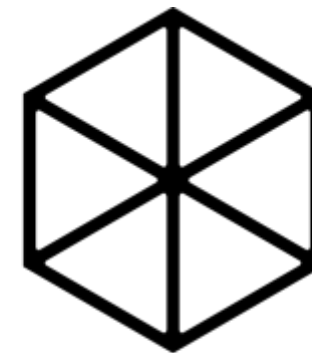
「水」

×



× 6のプレイヤー

=



Mizu Design



連携は必要。でも、こんなんで本当にできるのか

✖ 散見される悪例

・行政の人がよく言う「民にやらせる」という言葉

→ 上から目線すぎない？

→ 社会サービスを良くする企業からの提案を受け入れられる？

・官需系の企業に根強い「官は仕事をくださる“おかみ”」という意識

→ へりくだりすぎてない？

→ 社会を良くするアイデアを行政に提案できる？

・NGO/NPOに頼めばタダ・低価格

→ 活動が続かない



ゴール6を日本は本当に達成できるのか？



ターゲット6.2

2030年までに、全ての人々の、適切かつ平等な下水施設・衛生施設へのアクセスを達成

クイズ 「日本で汚水処理システムを利用できない人数は？」

☹️ > 1000万人 or 1000万人 > ☹️

約1200万人(平成29年度)

- 未普及地域では浄化槽が期待される
- ✖単独処理浄化槽から合併処理浄化槽への転換が急務だが、安価で実施できる民間技術が使えないケースも
→「連携」の必要性、制度の見直し

SDGs効果を科学的視点で評価しよう

✓これまでの例

「森づくりに取り組みます」「海岸のゴミ拾い活動をやります」

- ・定性的な指標

✕散見される悪例

水道水が安いから、工場の水を再利用しない。節水もしない。

- ・SDGs効果が不明

○こんな風に考えたい

何をどれだけやれば、どれくらいSDGsの達成に貢献できるのかを評価したい

- ・行動・活動の量とその効果を科学的・定量的に評価
- ・行動・活動を科学的に評価する取り組みが始まっている



SDGs効果の科学的評価事例① AGF

「ブレンディの森」鈴鹿での森づくり活動



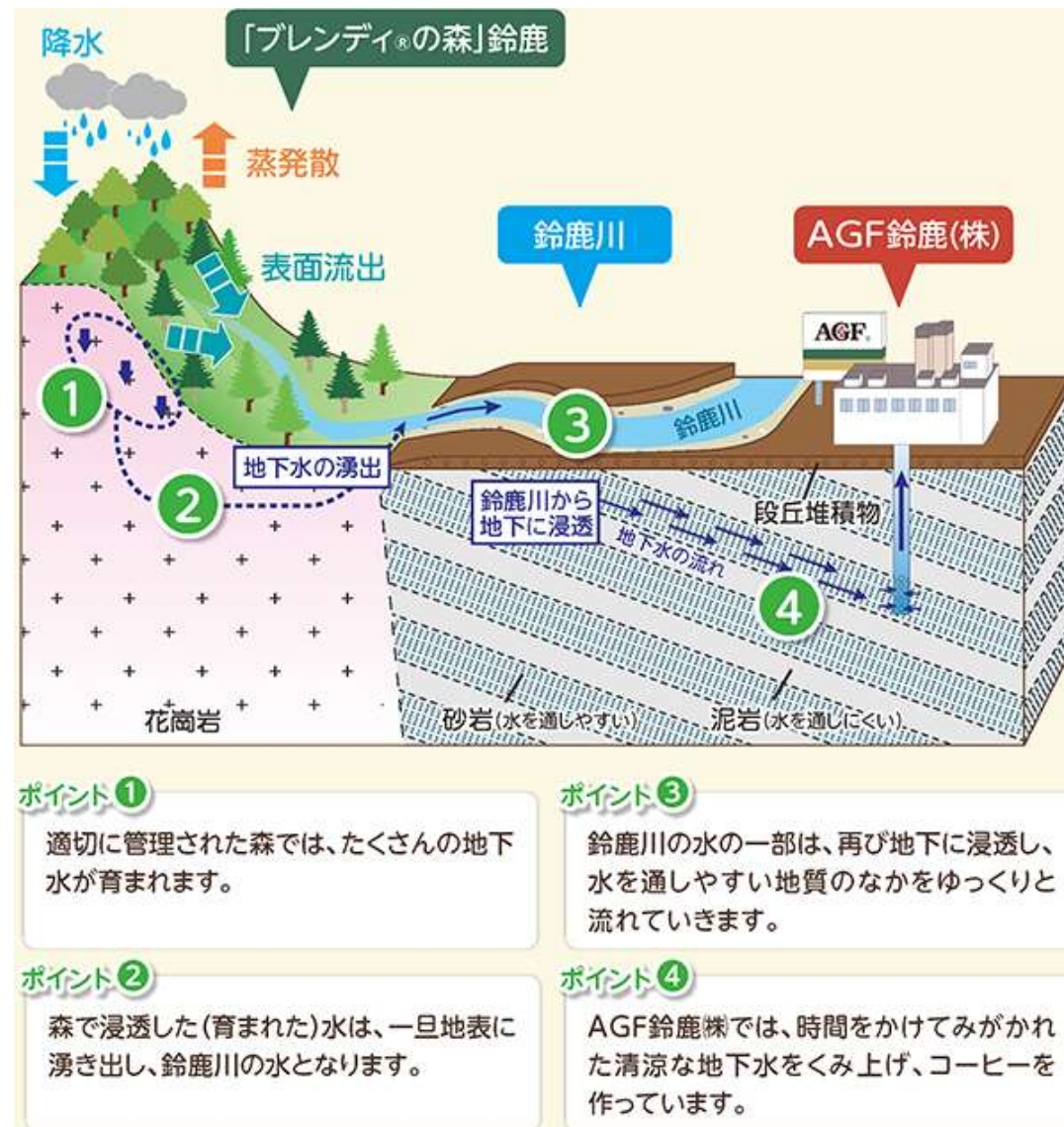
たくさんの地下水が育まれる



それをくみ上げてコーヒーを作っている

- ・森づくり活動と事業活動の関係を科学的に立証
- ・八千代エンジニアリング「水リスクラボ」が調査

出典：AGFサイト
<https://www.agf.co.jp/csr/environment/forest.html>



SDGs効果の科学的評価事例② アサヒGHD

「アサヒの森」での森林保全活動

総面積21.7km



年間地下水涵養量958万m³



アサヒGHDの水資源使用量の約40%



- ・CSRや社会貢献活動の一環として森林保全活動を行うだけではなく、地域や流域の水資源への寄与を科学的に定量化
- ・八千代エンジニアリング「水リスクラボ」が調査

出典：「企業が所有する森林の水涵養機能定量化の試み～「アサヒの森」を例として～（日本地球惑星科学連合2018年大会）

